

## 平成 26 年度 第 1 回心理学教育 F D / I C T 活用研究委員会

- I 日時 : 平成 26 年 4 月 26 日 (土) 14 : 00 ~ 16 : 00
- II 場所 : 私学情報教育協会事務局会議室
- III 出席者 : 木村委員長、大島委員、片受委員、横山委員、松田委員  
(事務局) 井端事務局長、森下主幹

### IV 検討事項

#### 1. 配布資料

- 資料① 平成 26 年度 化学教育 F D / I C T 活用研究委員会の活動計画
- 資料② 対話集会に関する検討事項 (メモ)
- その他 資料 公益社会法人私立大学情報教育協会 平成 26 年度事業計画
- 参考① 用語集
- 参考② アクティブラーニング事例集 1 長崎大学 大学教育機能開発センター
- 参考③ 付表 1 国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例 (1)  
長崎大学 大学教育機能開発センター紀要 第 3 号
- 参考④ 記事「双方向型授業」読売新聞情報
- 参考⑤ 記事「学び改革 急ピッチ」学長アンケート 日経新聞情報
- 参考⑥ 記事「大学 1 年生 難題で覚醒」主体的に学ぶ姿勢を養う 日経新聞情報
- その他 実践事例紹介 「環境・生活と化学」その他

#### 2. 議事内容

##### (1) 平成 26 年度の事業計画

平成 26 年度は、教育の質的転換に向けた教育改善を促進するため、I C T を活用した能動学修(アクティブ・ラーニング)への取り組み方策等について分野別にテーマを設定し、研究を展開する。その際、必要に応じて教員有志による対話集会を開催し、実践事例の紹介及び意見交流を通じて理解の促進を図ることを確認した。

##### (2) 平成 26 年度の委員会活動について

委員長より本年度のアクティブラーニングの事例研究、今年度中に「対話集会」(学系別)を開催する旨、説明があった。

##### (3) アクティブラーニングに向けた効果的な取り組み方の研究と対話集会について

- ・ アクティブラーニングの対話集会を、30 分野のうち 26 分野で検討しており、4 分野では来年度以降に実施する見込みである。
- ・ 対話集会の案としては、私立情報教育協会に登録している心理学の専任教員(サイバー F D 研究員) 600 人対象にアクティブラーニングの実践事例や話題を提供し、意見交換の対話集会を開く。参加者は 50 名程度と考える。

(4) アクティブラーニングの事例として長崎大学の取り組みを研究した

- 1 予習でテキストを読ませ、予習シート（用語調べ、著者の主張を自分で書く、質問を教員やTAを書く）

例1 「経営と経済」上級生チューターが回答）、ジグソー学習（領域別専門家会議（授業前）、チームで発表）、授業の最初の振り返りをチームで行う。大学院試レベルの事例問題を使ってディスカッションする。（参考資料2） 半分成功事例

例2 「数理と自然科学のススメ」（教養科目）（参考資料2.1）グループワーク、プレゼン、講義、小テストの組み立てで、積極的な学生は積極的に、消極的な学生には効果なし。マイクを向けても、クリッカーを使っても効果がなかった。失敗事例

例3 「精神看護学援助論」（専門必修科目）（参考資料2） 講義科目のうち8回をアクティブラーニングに当てる。この間教員は専門的知識の追加と助言にとどめる。模擬患者への看護過程の展開。教員はどうしてそのような看護過程になったのかを質問するように、よい点は褒めるように心がけた。成功事例

例4 北海道大学理学部の双方向授業。クリッカーの高度な使用例（正解のない問題など）。26年度から道内の6国立大学で教養科目を200持ちより、双方向型の遠隔授業を実施。（参考資料4）

(4) 対話集会の内容について

- ・ 2時間程度で実施。
- ・ 参加者には前もって事前準備をしていただく  
例「主体性を育む授業とは」（安西祐一郎）教員と学生だけでは難しいが、社会人を入れることで成功。（参考資料6）。
- ・ アクティブラーニングの授業評価：自己点検だけでも、ピアレビューだけでもだめ。その他の評価方法を検討する。
- ・ 成功事例でなく、途中経過の事例の方がよいのではないか。
- ・ 参加できない教員に向けて、収録しえて配信する  
（参加者の氏名、大学名等の個人情報ほださない）
- ・ 参加料は無料として、都内の大学を会場に実施したい。

(5) 対話集会実施に向けた検討事項について

- ・ 授業の形式は卒論、ゼミを除いた実験や講義。
- ・ 初年次教育の中ではどうか。
- ・ 大教室での講義や演習科目をゼミ化するという事に近くなる。
- ・ 職業に直結しているコースの学生は元々意欲が高いが、心理学のように一般教養に近い科目の選択科目ではどうか。授業で敬遠されがち。

- ・ 上智の大学院で他大学との共同で研究集会を実施したが、80名定員で、教員3名、TA5名でも大変だった。2年間のプログラムで終了（1年目成功、2年目うまく行かなかった）。40名ぐらいで、抽選形式にすればよいのではないか。1年次の心理学の英語論文の購読の授業と2年次の授業の8グループで、卒業生（院生）が1名ずつついて、文献の調べ方などを行う。
- ・ 社会との接点が重要、社会人からの招聘講師などがよいのか？
- ・ 卒業生が心理学を生かしているか？いわゆる臨床、福祉、産業、発達の専門系の職以外で。
- ・ 資格に関連する分野はやめたほうがよい。社会における問題解決力「知的タフネス」を高めるようなテーマで。
- ・ 発達障害系の学生が増えている。必修科目でないほうが良いのではないか。
- ・ 発達障害の学生を支援すべきと文科省で明示されている。選択科目の方が良い。
- ・ 心理の学生は、データの分析、報告書の作成などは長けている。

### 3. 次回に向けた検討事項

- ・ 都内の大学で30名～50名入る教室で検討する。
- ・ 開催日、プログラムを決定し、開催2ヶ月前に開催を案内する。
- ・ 実施時期は、8月は難しい。夏から秋は学会シーズン。3月中旬頃で検討する。
  - ※ 3月17日（火曜）を候補とする
  - ※ 場所は、東洋、上智、立正が候補
  - ※ 大学のFD研究会と共催ということも可能。

次回の委員会：26年7月19日（土）午後2時から開催予定。